

蛇足漫步 大隊長殿と映画論争す

昭和19年晩夏、私は淀川鳥飼大橋を向こうに越えた鳥飼村の中部7651部隊第3大隊本部に赴任した。任務は13期幹部候補生の教育である。主任教官は8期の須方少尉殿で、私はその補助者として命令を受けた。私を指名されたのは大隊長池辺少佐殿であつた。と言うのも私が見習士官として最初に派遣されたのが、大阪府庁の屋上に中隊長位置を置く第16中隊であり、その時の中隊長が池辺さん（当時大尉）であつたのである。30歳前後のパリパリの陸士出身の現役将校であつた。約半年

後少佐に進級され、第3大隊長に栄進されたのである。その府庁時代の誼で、私を指名されたのに違いない。主任教官の須方さんとは前から知己を得ており、しかも鳥飼村は私が初年兵として1期の検閲まで教育を受け、且つ幹部候補生時代の教育全期間を送つた懐かしい陣地なのである。口笛を吹きたいような気持ちで赴任したものである。

13期候補生は総員40名ばかりであつた。甲・乙種分離前でもこれもいい顔をしていた。その中に2名の韓国出身の兵隊が居たが、本題に関わりは無いので割愛する。

鳥飼村は北に阿武山をひかえ、風の強い農村である。淀川からの空つ風も厳しいが教育は極めて順調に進展していた。特記すべき事件もなく、後10日ばかりで前期の教育は終わり、いよ

いよ甲・乙を分ける試験を迎える段階になっていた。私にも経験があるが甲種になるか乙種になるかは、候補生にとって大変な違いで、試験直前の彼らの顔つきは必死の形相と言うべきである。甲種は見習い士官を経て将校となり、一方乙種になった者は永久に下士官に甘んじなければならぬ。毎晩真夜中まで猛勉強で、寝る者はいない。

その頃或る晩、空襲警報が鳴り淀川の向こう岸、寝屋川方面に250キロ爆弾が数個落とされたことがあった。物凄い音響でまるで数百メートル先が爆撃されたように感ぜられた。戦闘要員でない候補生は、防空壕に避難するばかりである。須方少尉の号令一下、予め定められた各自用の壕に退避する事になったが、候補生たちはもじもじして一向に壕に飛び込もうとはしな

い。それも道理、昨夜の雨で壕の底には水が溜まつていた。飛び込めば膝までズブ濡れとなる。と言って生命の危険はあろう筈が無い。須方さんは激昂した。「小倉！候補生を突き飛ばせ」上官の命令は絶対である。やむを得ず近くに居た数名を突き飛ばした。

やがて空襲警報は解除になったが、須方さんの怒りは治まらなかった。「貴様達は将来の国軍の幹部となる人間である。自分の身体を大事にしろ！足が濡れるのが嫌なら、前の晩に壕の水を浚えて置け！」日頃温厚な教官で知られた人が、まるで別人のように怒鳴り続けた。候補生達は頭を垂れて一言も無かつた。

翌日朝食の時、須方さんは私にばつの悪そうな顔つきで、語つ

た。「小倉君、君の感想は如何？一寸やり過ぎたようだね」
私は返答に窮した。須方さんか怒るのも当然と思えるし、と言
つて非戦闘員である候補生がズブ濡れになるのを覚悟で、濠に
飛び込むのも大人気無い・・・柔従不断な私のいつもの悪い癖
で、自分の意見を述べるのが躊躇われた。

※

それから数日後、大隊で慰問の映画会が開催された、ニュース
映画が数本と時代劇が1本。題名は今でも憶えているが、新興
キネマの「安中草三郎」浅香新八郎主演の時代劇であった。一
角の映画通をもつて任じる私も、久万ぶりの映画は楽しかった。

その夜、大隊長の招きで宴会が催された。私は軍隊時代酒も煙草
もやらなかったもので、一同のご機嫌に渋茶でお付き合いする
羽目になった。宴半ばにして大隊長の得意の演説が始まった。
大阪府庁屋上の16中隊で、当時の池辺さんの酒癖の悪さは、
よく知っている。当時の将校集会場の内務は、東松喜弘氏が担
当しておられた。同氏は今なお戦友会に北海道から駆けつける
義理固い人である。私は東松さんから米びつを受取り、上官の
茶碗にご飯を注ぐ役目であった。これが嫌で三度の食事が億劫
でならなかった。しかも時々酒が入ると、池辺さんの長広舌を
拝聴しなければならぬ。従つてその夜の演説は手慣れたもの
で、只黙つて聴いていれば良いと多寡を括つていた。大隊長は
得意のアメリカの3S政策批判を滔々と述べ出した。最近耳に

することは少なくなつたが、戦時中は盛んに論じられたものである。これを要約すれば、三つのS、つまりスポーツ・セックス・スクリーンをもつて、アメリカは日本人の精神構造を脆弱ならしめんとする野望を持つている・・・と言う説である。今晚の映画はその証拠であると大隊長は断言した。これに反論する者が一人も居なかつたのは言う迄も無い。然し私は内心不満であつた。それと言うのもその夜の映画は、映画狂の私に言わしめれば、愚作も愚作三流以下の論評に値しない駄作に過ぎない。到底映画史に残るような作品では無い。大隊長は一やくざに過ぎない草三郎か、公の官吏たる捕り手をバツタバツタと斬り殺すのは、もつての外と、息巻くのである。物心ついてからと言うもの、幼年学校から陸軍士官学校を経て世俗に染まつて

いない池辺さんにとつては、許し難い暴挙なのであろう。誰も意見を述べる者が居ない為か、演説内容は次第にスポーツ攻撃や若い男女の恋愛の無軌道振りに文句をつけ出した。そうした最中に池辺さんは突然私を名指し「小倉、意見を述べてみよ」と言つた。余りの唐突さに戸惑い上手くはないが、ベルリンのオリンピックを例にあげ、スポーツは国威宣揚に役立つし、青少年に大きな夢を与えると答えた。これに対し大隊長は真つ当な返事をせず、次いで「・・・では映画はどうか？」ときた。これが問題なのである。

私はオウム返しに答えた。つまり今日の映画は取るに足らぬ三流の駄作であり、これをもつて3S理論の素材にはならぬこと及び芸術性溢れる名画は、文学的価値があり、人間の情操を高

めるものと思う・・・と申し述べた。それで置けばよいのに、勢いに任せて尊敬しているルネ・クレール、ジュリアン・デュヴィヴェ等数名の外国名監督の名を拳

げ、その代表作の素晴らしさを滔々と申し述べたのである。忽ち大隊長は顔色を変え、パイと席を立てて終った。

白けきった宴会は早々に散会し、私は須方少尉と共に個室に引き上げた。部屋に戻った私に対し須方さんは、「大隊長の気性を一番よく知っている筈の君らしくない言動であった。事の善し悪しは別にして、あれまで固執する必要があっただろうか」と憂い顔でつぶやかれたのが、戦後50年経過した現在も忘れられない。

※

数日後私は教官の任を解かれ第16中隊に復帰した。従って前記の韓国出身の2人のその後の消息は知らない。この集合教育のエピソードについては、別稿「朴宗述君のことなど」において、当時の韓国出身の兵士（愛国兵と呼ぶ）について、詳しく書いて置いた。

池辺さんは噂によれば、金銭登録機の会社の娘さんと結婚されその会社の社長を継がれたと聴いたが、第16中隊の戦友会の案内を毎回発送しているけれど、何の回答も戴けないで居る。鳥飼村の陣地跡に一度出掛けたいと思いつつ、遂に敗戦50年を迎えて終った。

※

入営前は故山中貞雄監督の助監督になることや、シナリオ・ライターを夢見ていた私が齡80を超え、事もあろうに税理士と
言う俗業に有ることを思えば、うたた感無量！

我が孫邦裕がテレビの漫画に熱中するのを見て、この子が我が
青春時代の夢を継いで、映画監督になって呉れないか・・・と
思いながら、独り苦笑する今日この頃なのであります。
池辺さん、須方さんのその後の消息を私は知らない。

(終わり)